

# 修正力

現在、全校生徒が国語の授業で書写に取り組んでいます。書写では、日本の文字文化に関する「知識及び技能」について理解し、文字を効果的に書く力を育てることが大切だとされています。

しかし、五十分間の授業で期間集中的に書写に取り組んでも、その力がめきめきつくということはずありません。しかし、どうせ取り組むなら、可能な限りその力を付けさせたいものです。それが無理だとしても、効果的に文字を書くためには何が大切かを習得させたいと私は思います。

いつ頃からでしょうか。小中学校での書写の作品に、朱書きを入れなくなりました。作品として尊重しようということからでしょうが、清書の作品ならともかく、練習段階ではほとんど朱書きを入れるべきだと私は考えています。なぜなら、自分の筆跡と朱書きの筆跡を目の当たりにするだけで、自分の改善点がわかるからです。

私は左利きです。文字まで左で書いたらみっともないという明治生まれの祖母に矯正（きょうせい）されました。書道塾に入れられたのです。そのおかげで、文字は右で書くようになりました。しかし、それ以上に、「修正力」が身に付いたように思います。

その書道塾では、課題が先生から与えられ、一日五〜六枚の半紙に練習します。一枚練習し終えたところで、先生のところにもっていきます。すると先生は、朱墨（しゅぼく）で私の文字を修正します。それをもらって席に戻り、修正点を意識しながら、次の演習に取り組んでいました。

黒の文字と朱の文字が重なった半紙を見ながら、「先生はこの画（かく）を短めに書いているな」「もっと右上がりに書けばよいのか」などと発見することが、徐々に上達に結び付いていったのだと思います。そんなことを考えながら取り組むと、一時間かかっても五〜六枚の半紙を消費するだけで精一杯でした。

学校の授業でこれをやるのは大変難しいと思います。三十人以上の生徒の作品に朱書きを入れるだけの時間の余裕はありませんからね。だったらどうするか……自分で考えることです。「どうしてバランスが悪い字になってしまうのか」「どうして縦長（横長）の文字になってしまうのか」などと、自分で自分の文字を分析することです。どうしてもわからなかったら、そこで初めて質問すればよいのです。

「何だか勉強と同じだ」と思った人はいませんか。勉強だけでなく、スポーツでも物作りでも同じです。時間をかけて自己満足的な努力を積み重ねるより、分析して直すべき点を見つけ、短い時間でそれを修正する努力を積み重ねた方が成果が上がりますよ。私は書道を通してそれに気がきました。

（九月九日 記）

